

# 空が見ていた

Junji Yamagisawa

## 山際淳司

角川文庫

### 一二月のエンブレム

このうえなく軽く、そして頑健に作られたヘルメットがぶつかりあうと、ガキツという音がひびきわたり、それは骨のきしむ音のようでもある。

ヘルメットにショルダーパッド、そしてエルボーパッドをつけて突進していく。アメリカン・フットボールとは、そのぶつかりあいのスポーツであり、そのなかで幾何学的にボールを運んでいくゲームである。

松田明彦。彼は京都大学アメリカン・フットボールチームのキャプテンであり、ポジションはラニングバックである。チームは通称「ギャングスターズ」と呼ばれている。松田はそのギャングスターズの中心選手だ。

一二月の甲子園球場である。

関東地区の学生アメリカン・フットボールリーグを勝ち抜いてきた「日大フェニックス」と、関西のリーグ戦を勝ちあがってきた「ギャングスターズ」のあいだで第37回の「甲子園ボウル」が行われた。

アメフトでは、オフENSE（攻撃）とディフェンス（守備）の分業が進んでいる。オフENSE・プレーヤーはチームがボールを確保しているときにのみ、フィールドに出る。ランニングバックはオフENSEの要である。ゲームを動かしていくべきクォーターバック（QB）のうしろに位置し、

QBからパスされたボールをとにかく前へ前へと運んでいく。もう少し説明しておけば、ランニングバックのうちQBのすぐうしろに位置するのがフルバック(FB)であり、通常、そのさらにうしろに位置するのがテイルバック(TB)と呼ばれる。松田明彦は京大ギャングスターズのTBである。FBは、ボールを持ったTBをガードすることが多く、チームのリーディング・ラッシャーはTBであることが多い。

その年の甲子園ボウルは、日大フェニックスが、当然、勝つだろうといわれていた。日大は公式戦で四三連勝をつづけ、甲子園ボウルでも四連覇をつづけていた。

そして、当たり前前の結果が出た。ゲームが終了するとスコアは65―28。フェニックスの圧勝である。

しかし、ギャングスターズのメンバーの表情は明るかった。松田明彦にしても、なにがしかの満足感があった。

京都大学が甲子園ボウルに出場するのは創立以来三五年の歴史のなかで初めてのことだった。高校時代からアメフトをやっている部員は少ない。キャンパスに入って初めて楕円形だえんのボールを手にする選手がほとんどだ。そのチームが甲子園ボウルに出場するまでになった。その喜びも、ある。

それだけではなかった。

ノーサイドの笛が鳴ったとき、松田は汗と土のにおい、そして芝のにおいをかいだ。一二月の甲子園に吹く風は冷たかったが、その風にまじる芝のにおいは、おいそれとは忘れられないだろうと思った。

そのとき彼は、ちょっとしたこと思い出した。左のエルボーパッドの内側にしまっておいた「26」という数字のエンブレムのことである。右手でエルボーパッドの内側をさぐり、それがちゃんとそこにしまわれているのをたしかめると、ホッととしてその上を撫なでた。

松田のバックナンバーは「31」である。

「31」番の松田は、その日「26」のエンブレムと一緒に走った。そのことを彼は一生忘れないだろうと思った。京大ギャングスターズが甲子園ボウルに出場できたのは、ひよつとしたら、その「26」番のせいかもしれない。チームのだけれども、そう思っていた。松田も、そう思った。

TBの松田はその日、三三回にわたってボールを持った。そしてトータルで312ヤード、前進した。タッチダウンを二回、記録した。申し分のない記録だった。ふつう、甲子園ボウルに勝ったチームから選ばれる年間最優秀選手に、敗れたギャングスターズの、ほかならぬ彼が選ばれた。「ミルズ杯」と呼ばれる、ずつしりと重いトロフィーを手にしたのは松田明彦だった。

しかし、そのことよりも「26」のエンブレムのほうが、彼にとつては重要だった。

松田明彦は、都立の富士高から京都大学に入学した。中学時代はハンドボールの選手。高校に入ると「さらに激しいスポーツを、やりたくなった」。そこにアメフトのチームがあることを知って、迷わず加入。高校時代はQBをつとめた。都の大会で四位に入ったのが三年間のベストである。大学は京大と決めていた。単にアメフトをやるだけなら、東京にもいくつかの私大があった。京大を選んだのは、アメフトだけで四年間のキャンパス・ライフを終えてしまいたくなかったから

だ。現役で受験して失敗。一浪して京大工学部に入った。そして、すぐにギャングスターズに加入。  
 「〈26〉番と会ったのは、一年生の五月九日でした。彼も学校のガイダンスが終わると、まっさきに加入手続きをしにきていた。同じ工学部で、彼は二浪して京大に入ってきたんだといっていたね。それも、京大でアメリカン・フットボールをやりたいがために二浪したんだ、と」

〈26〉番は、藤田俊宏という。

藤田は宮崎県の延岡西高の出身だった。高校時代、アメフトをやっていたわけではない。延岡西高にアメフト・チームはなかった。藤田は陸上部に入り、ハイ・ジャンプの選手として活躍した。

同時にギャングスターズに加入したのは約八〇名。人数だけは多かった。それが四回生になると、わずか五人に減っていた。

藤田は、松田よりも体が大きかった。藤田は174cm、72kg。松田は171cm、72kgである。足も、藤田のほうが速かった。プロテクターをつけたまま40ヤードを走る。松田は5秒フラット。藤田は4・9秒である。

松田の話聞いてみよう。

「藤田が〈26〉のバックナンバーをつけたのは、京大アメフト・チームの先輩に津島さんという人がいて、藤田はその津島さんのプレーにあこがれ、そのバックナンバーをひきついでんです。ぼくはやはり先輩で、テイルバックをしていた左滝さんのつけていた〈31〉番を選んだわけです。

二年になって、おたがいにおフェンスのレギュラーになった。最初は彼がテイルバックに選ばれ

たんです。ぼくがフルバックですね。ところが、藤田はケガをした。一度ならず、二度つづいたんです……」

藤田俊宏は二回生の春、左足首を骨折した。その間、松田がテイルバックに入った。秋になると、藤田はテイルバックとして戦列に復帰。ボールをかかえて、敵陣に突進し、あるいはオープンをまわって独走するのが藤田だった。そして、また骨折。二度目は右の腓骨ヒコボネ、すねのあたりである。そして、また松田がテイルバックに――。

松田は、そのままテイルバックとして定着した。ボールを持って、華々しくグラウンドを走るの  
 は、松田のほうだった。

アメフトのリーグ戦は秋に始まる。関西では八つの大学が一部リーグを形成している。リーグ戦は七試合。三回生秋のリーグ戦で、松田はトータルで1395ヤードのラッシュを記録した。一ゲームで398ヤードという記録も作った。それ以前の記録もシーズン1200ヤード台である。それを大幅に上回る新記録だった。

ギャングスターズの練習時間は、さほど長くはない。メンバーは、なぜか、工学部の学生が多い。実験を伴う授業が多く、それを終えて農学部の北側にあるグラウンドにやってくると、たいてい夕方の五時ごろになる。それから夜の八時までが練習時間だ。その倍に近い時間をかけて練習するチームもある。

ランニングバックは、ボールを持って、ただ走ればいいというわけではない。相手のタックルをかわしながら、そして全体の選手の動きを見ながら、サイドステップをくりかえす。

「きつい練習を、あいつは人一倍、多くこなしていたんだ」  
松田がいう。

「いつでも、テイルバックに入れるだけの練習を積んでいた。なぜなら、ぼくがいつケガをして戦列を離れるかわからないわけですから」

二人とも、銀閣寺のすぐ近くのアパートを借りていた。歩いて一分とかならない距離だった。行きつけの喫茶店も同じである。〈ガスパー〉というその店には、毎日のように通った。酒を飲むのも一緒、アメフトの話を始めれば、きりがなくつづいた。四回生になると、松田が主将になり、藤田が副将に選ばれた。

「とにかく、いいライバルだったんです。あの日までは、ですね」

一九八二年の五月五日である。

その日は毎年、京都ボウルが行われる。関西の名門チーム全関学と全京大の定期戦である。OBをまじえた総力戦が展開される。

藤田俊宏は、その試合中、倒れたのだ。

気分が悪いといってベンチに戻り、しばらくして意識を失った。病院に運び込まれたが意識は戻らない。開頭手術を行い、人工呼吸器をつけた。呼吸が一度止まったあとの、手術だった。

翌朝、呼吸器を外すと担当医はいつた。そこで自力で呼吸をすればいいのだが、と。人工呼吸器を外すと、一度、呼吸が止まった。ほぼ二分間ぐらいだった、と松田はいう。そして、再び心臓は動き始めた。

松田は、あらためて京都ボウルのVTRを見た。くりかえし、見た。しかし、藤田が頭を強く打つなり、妙な当たり方をしたシーンは見あたらなかった。なぜ、意識を失ったのか、わからなかった。しかし、何かが原因になって脳圧が高まり、脳内出血したことは間違いなかった。外傷はなかった。

藤田俊宏が呼吸を完全にストップしてしまうのは、それからほぼ一か月後の六月三日早朝のことである。その間、一度も意識が戻ることはなかった。

夏を迎え、ギャングスターズは合宿に入った。そして秋になり、リーグ戦が始まった。ギャングスターズは快進撃をつづけた。

「いつものシーズンとちがっていた」

松田がいう。

藤田俊宏の〈死〉がチームに影響を与えているのは明らかだった。

アメリカン・フットボールは1プレーごとに緻密な作戦が立てられる。

オフフェンス側は4回の攻撃を許される。その間に10ヤード前進すると、〈ファースト・ダウン〉と呼ばれ、さらに4回の攻撃が許される。そしてタッチダウンへと持ちこんでいく。QBは、ランニングバックにボールを手わたし、走らせることで前進するか、あるいはワイドレシーバーを敵陣深く侵入させ、そこにボールを投げロングパスを決めるか、1プレーごとに選ばなければならぬ。ロングパスが、途中でインターセプトされれば、ボールはその瞬間から相手側のものになる。

また、4回の攻撃で10ヤード前進できないと、その瞬間から攻守は交代する。

敵のディフェンスの動きを見ながら、きめこまかな作戦をたてるのは、たいていベンチの監督である。監督は1プレーごとに選手を入れかえ、新たにグラウンドに出ていく選手に次の作戦をさざけていく。オフフェンス側は1プレーごとにハドル(円陣)を組み、ロングパスを投げるかランニングバックに走らせるか、それぞれの動きを確認しあう。

京大ギャングスターズは、リーグ戦を六連勝という成績でたたかってきた。同じ成績で関学も勝ちぬいてきた。八二年の関西アメフト・リーグは予想どおり、関学と京大の最終戦で決着がつくことになった。勝つだろうといわれたのは関学である。京大は七六年のシーズンに一度、関学に勝っている。しかし、そのときはおたがいに六勝一敗となり、プレーオフの結果、関学が勝った。京大は甲子園ボウルへの出場を惜しくもはばまれたわけだった。それから六年後に、再び京大にチャンスがまわってきた。

「松田は必ずマークされるだろう」

と、京大の水野監督がいった。

「オーソドックスに攻めていけば、必ず松田は関学のディフェンス陣につぶされる。目に見えて  
いる。」

「そこでだ——」

といって、監督はスペシャル・フォーメーションを指示した。対関学戦が行われたのが一月二  
一日。その一週間ほど前のことである。

ギャングスターズ、オフフェンス陣の通常のフォーメーションは1フォーメーション、ごくオーソ  
ドックスなものだ。最前列にラインが並び、そのセンターのすぐうしろにQB。QBからFB、T  
Bが直線上に構える。センターからボールを受けとったQBは、敵のディフェンスとラインがぶつ  
かりあっている間にボールをTBにわたす。TBはディフェンス・ラインのすき間を狙って突進す  
る——それが基本パターンである。

「TBの松田はここに位置する」

水野監督がミーティングの席上、黒板に書きこんだTBの位置は、左サイドである。QBから見  
ると、TBは左のほうに見える。

TBの松田明彦の話を聞いてみよう。

「つまり、意表をつこうというわけです。これにはもう一つ、背景がありました。QBのロング  
パスが今シーズンは比較的良好に決まっていたことです。八一年は、ほとんどロングパスを投げられ  
なかった。敵は、ぼくの動きさえ封じこめておけば、それでよかったです。今シーズンは、京  
大の攻撃が多彩になっていった。敵のディフェンスはロングパスも警戒しなければならぬ。守りに  
くいわけです。そのうえ、ぼくのポジションが、いつもとはちがっていた。京大はどう攻めてくる  
のか、わからないでいるうちにロングパスを決め、あるいはフルバックが走り、ディフェンスが崩  
れはじめると、QBからショートパスを受けたぼくが走る。

でも、それだけで勝てたわけじゃない——」

松田は、さらにつづける。

「スペシャル・プレーは今年に限ったわけではないんです。関西でのリーグ戦の最後になる対関学戦では、今までも何らかのスペシャル・プレーを考えてきた。ところが、途中でダメになつてしまふ。一度、その攻撃をブロックされると、また失敗するのではないか、結局、そのまま負けてしまふのではないかという不安が頭をもたげてきて、気がつくとおソドックスなフォーメーションに戻っているんです。また逆に、敵のスペシャル・プレーに幻惑されてしまつたり。それで、容易には甲子園ボウルに出られなかったわけですね。最後まで、こちらの立てた作戦で押し切つてやろうという集中力と気迫に欠けていたのかもしれない。」

今年も、そうじゃなかった。ベンチには藤田の遺影を持ちこんでいました。絶対に勝つんだと、みんなが思いこんでいた。ぼくは走るふりをして、実際に走ることは少なかった。対関学戦では、ぼくがボールを持って走つたのは、わずか52ヤードしかありません。フェイントです。ぼくのタッチダウンは一つもなかった。それでいいんです。それだけ、いつものギャングスターズのフォーメーションとは違っていただけですから。それだからこそ、勝てたんですから。」

対関学戦。スコアは17―7だった。

シーズンの、リーグ戦における松田のラッシング・ヤードは1323ヤードでおわつた。対関学戦で、いつものように走れば、八一年に彼自身が作つた1395ヤードという記録を破ることはまがいなかった。その差、わずかに72ヤードなのだから。

それはしかし、たいした問題ではなかった。

「高校生は甲子園の、あの土にあこがれますが、ぼくらは同じ甲子園の、外野に敷きつめられた

芝にあこがれるんですよ」

なぜなら、甲子園ボウルは、球場の、野球でいえば外野にあたる、芝のうえでたたかわれるからである。大阪の長居陸上競技場で行われた対関学戦に勝つたあと、松田は藤田俊宏の遺影をかかえて涙を流した。

甲子園ボウルが行われる日、松田は〈26〉番のエンブレムをグリーンユニフォームの左肩のあたりに縫いつけた。

試合が始まる前、そのエンブレムにクレイムがつけられた。まぎらわしい、というのである。仕方なく、松田は〈26〉を左の腰のあたりにつけかえた。

〈日大フェニックス〉は、その松田を、ほとんどマークしていなかった。誰かを特別にマークしなくても、フェニックスが勝つのは明らかだった。力の差は歴然だった。フェニックスは、篠竹監督の考えだしたショットガン・フォーメーションでできたえられてきたチームである。優秀なQBが鋭いショットパスを的確にきめていく。QBとレシーバーのコンビネーションは、少なくとも日本のアメフト界では、絶妙といえる。

ギャングスターズは、いつもどおりのフォーメーションに戻つた。松田は思う存分、走ることができるはずだ。

第1クォーター。松田はハーフウェイあたりからボールを受け、約40ヤード独走した。赤のユニフォーム、フェニックスのタックラーがその松田を追つた。



優勝トロフィーと故藤田選手の遺影  
を掲げて勇躍する京大の松田主将

「一人、二人、三人……。タックラーをかわしたことをよくおぼえています。かわしながらスピードをあげていく。加速しようとしたとき、右から四人目のタックラーがきたんですね。思わず手放したボールがタッチラインにころがつていく。そのとき、ぼくのすぐうしろからカバーしてくる選手がいた。そのボールをおさえてくれ、そうすればタッチダウンだ！ そう思ったとき、ぼくのわきをかけ抜けてボールをおさえた選手、グリーンのユニフォームを着ていた。あ、あいつだと瞬間、思った。あいつがリカバーしてくれた。もちろん、本当は別の選手だったんですけども……」

試合中、気がつくと、腰に縫いつけていた〈26〉のエンブレムがとれかかっていた。松田はそれをそつとひきはがすと、左のエルボーパッドの内側にしまいこんだ。

この日の記録を再び記しておけば、スコアは65―28。敗れたギャングスターズは四つのタッチダウンを記録した。そのうち松田は二度、敵のタッチラインを越えてゴールにとびこんだ。三二回ボールを持ち、312ヤードを走り抜いた。その中には第3クォーター、キックオフのボールをダイレクトキヤッチし、そのまま相手のタッチラインまで独走した95ヤードも、含まれている。

表彰式で、最初に松田明彦の名前が呼ばれた。彼はそれを敢闘賞だろうと思った。アナウンスがきこえなかったからである。敗れたチームから選ばれる敢闘賞がなぜ最初に手渡されるのかいぶかしみながらトロフィーを受けとった。しばらくすると、もう一度、彼の名前が呼ばれた。チームメイトがまたお前だとうながした。おかしいなと思って、手もとのトロフィーを見ると、そこには〈ミルズ杯〉と書かれていた。

専任コーチの下でしつかり取り組む関学大に比べ、水野弥一は週末だけの「サンデーコーチ」だった。1980年、専任監督として復帰する。勝利に飢えた指揮官は選手たちを徹底的に鍛えた。

1982年5月5日、全京大全 関学の京都ポウルの試合中にRB藤田俊宏が突然倒れ、脳挫傷で入院した。選手は交代で必死の看病にあたったが、6月3日に帰らぬ人となった。

「藤田のためにも必ず勝つ」。監督と選手たちの心が一つになった。勝ち負けより、「中途半端な試合だけは藤田に対して申し訳ない」と思った。これ以降はチーム力がないときでも関学大と互角の試合ができるようになった。

京大アメリカンフットボール部のOB会費は関学大より2000円高い2万2000円。その差は不慮の事故への対策費という。物心両面の支えで、上昇の道を歩みは